

カラフル

～しあわせへの道～

2011 年度 春学期「考えるための日本語(テーマを発見する)」

Picari グループ文集



《目次》

I	まえがき	2
II	メンバーレポート	
	○沢里翔子：「なりたい」私を見つける.....	3
	○大畠未来：私のライフデザイン.....	15
	○桂：「常識」の峰を越えよう.....	35
	○中山真菜：「自律と共生」を目指した私の原点.....	44
III	あとがき	54

I まえがき

私たち Picari はしょうこ、みく、桂、マナの4人でそれぞれのテーマに取り組みました。一見、何の関連性もないテーマについてそれぞれがバラバラに書いているようにも見えますが、グループで話し合いを重ねていくうちに、“親”というキーワードで全員が繋がっていることがわかりました。それは、“親”そのものがそれぞれのテーマになっているということではありません。幼い頃から自分にとって最も身近な存在だった親について、その親から影響を受けている現在の自分について振り返り、そしてそこから「私はどのような幸せを目指すのか」を考えるというのが Picari のコンセプトです。Picari というグループ名は、ピカピカに輝く私たちの未来へという願いをこめてつけられました。

それでは、私たちが自分の過去・現在を振り返り、幸せな未来へと向かってゆく様子をご覧ください。

Ⅱ メンバーレポート

○沢里翔子

「なりたい」私を見つける

1. はじめに ―テーマ設定の動機―

私はこれまで日常生活のどのような場面においても、周囲の人間といかに円満な関係を築くかということを第一に考えて自分の行動を決定してきた。例えば、相手の言うことが明らかに間違っている場合でも直接指摘したり否定したりするようなことはほとんどないし、人に依頼されたことは基本的には断らない。相手の意見と対立しかねない意見がある場合、自分の意見は言うべきではないとも思っていた。相手や場面に応じて若干の差はあるものの、基本的には他人と衝突したり、他人に不快感を与えたりするような行動は徹底して避ける人生であった。私がこれほどまでに他者との「良好な」関係に執着する理由は、幼い頃から見えてきた父の姿と関係がある。

私の父は「孤独な成功者」である。彼は20代で単身東京に出てきて数年で自分の会社を興し、首都圏に家を立て、外車に乗り、家族を海外旅行に連れて行き、子どもたちを私立の学校に入れた。実家が裕福だった訳でも、世間に認められるような学歴がある訳でもない父にとってそれがたやすいことではなかったというのは、大人になった今、なんとなくではあるが想像できるようになった。そのための努力をしてきた父を私は尊敬しているし、私たち家族に豊かな生活をさせてくれたことに対しては感謝もしている。そのような「成功」を支えたのは、父の確固たる信念や芯の強さ、そして自らの信念に基づいて行動する行動力であったのだろうが、それらは時に良好な人間関係を阻害するものでもあると私は子どもながらに思っていた。もともとの芯の強さに加え、確固たる信念に基づいた行動がある程度「成功」しているというプライドも手伝って、父は自分の「正しさ」を信じきっており、自分と異なる考え方は徹底的に排除した。父は自分が間違っていると思うものに対しては、どんな相手であっても抗議をためらわなかったし、意見の衝突も恐れなかった。その結果、言い争いや怒鳴り合いにまで発展してしまった場面を私は子どもの頃から何度も目撃しているし、意見の食い違いが原因で、自分の家族と何年間か口も利かない状態であったことも知っている。

そのような父の芯の強さはビジネスの世界で成功するためには重要な要素なのかもしれない。しかし、自分の「正しさ」に固執し、自分の正義と一致しなければ家族の意見であっても一切耳を傾けない父の考え方に、私は次第にうんざりするようになった。そしてそれと同時に、家族でさえもうんざりするような頑固さを他人が受け入れられるはずがないと思うようになった。ビジネスの世界を退いた後は友達の1人もいない父の未来を想像し、どんなに素晴らしい「成功」を手に入れても、友達の1人もいないような生き方は嫌だと思った。自分の正義を主張して人と対立してしまうならば、自分の意見は隠してでも相手に合わせ、大勢と良好な人間関係を築いた方が良いのではないかと、私がそのように考えるようになったのは、このような父の生き方がきっかけであった。

そのようにして私は自分の意見を主張したり、相手に対して抗議したりすることをほとんどしなくなり、周囲の人間とトラブルを起こすことなく「無難な」人間関係を構築できるようになった。中高時代は同級生だけでなく先輩や後輩、先生の間でも顔が広く、自分の周りにたくさんの方がいることを快感に思っていたこともある。しかし他人の顔色ばかりをうかがい、「自分」から目をそらすような生き方を現在まで続けてきた結果、私は自分の好きなこともわからなければ、特別にやりたいと思うこともない。それは他人の顔色をうかがうことで日々疲れきってしまい、「自分」に向き合う時間を作ることできなかったことが原因かもしれない。自分のやりたいことがわからないという現状に直面する機会が増えるにつれて、相手と「良好な」関係を築くことにこだわって、「自分」から目をそらし続ける人生で果たして良いのだろうかとの自分の生き方に対して疑問を抱くようになった。また「自分」を排除して築いた人間関係は本物の人間関係と言えるのだろうかと思うこともある。これまで目をそらし続けてきた「自分」に目を向け、「自分」について再考することが本レポートの目的である。

2. 対話報告

◇対話相手を選んだ理由

対話相手のKは中高時代の同級生である。私がKを対話相手として選んだ理由は、①Kと私が高校を卒業してからも親しい友人関係を続けていること、②Kと私の人間関係構築のスタイルが全く違うことの2点が挙げられる。

私とKが初めて同じクラスになったのは高校2年生の時である。しかし高校2年生の時点ではクラスメイトとして最低限の会話を交わす程度で、特別に親しい存在ではなかった。高校3年生で再び同じクラスになると、私とKは急接近するのだが、その時点で私はいつもの通り、Kと「良好」で「無難」な関係を築こうとしか思っていなかった。「良好」で「無難」な関係と言えれば聞こえは良いが、「自分」の本音を隠して上辺だけで構築した人間関係は結局その場限りで長続きしない。携帯電話に500件近く保存されている連絡先のうち、実際に連絡を取り合っているのは10人程度にすぎず、名前を見ても思い出すことすらできない人も何人も登録されている。その中でKとは高校を卒業して6年以上経過した今でも連絡を取り合っている中で、私が「自分」を隠さずに付き合うことができる数少ない存在である。

そして、Kと私は人間関係構築のスタイルが全く異なっている。私の目から見たKは積極的に他人と関わろうとするタイプだった。新学期になればKの方からいろいろな人に話しかけて友達を作り、また自分が納得できないと思えば自分の意見を主張することもできた。このような私とは真逆のスタイルで人間関係を構築するKは、私にとって羨ましい存在であると同時に、私にはまったく理解できない部分も多くあった。異なるスタイルを持つKとの対話を通じて自分の人間関係構築のスタイルを振り返ると同時に、「自分」を排除せずに他人との関係を構築するKの考えにも触れることができるのではないかと考え、Kを対話相手に設定した。

◇Kの人間関係—こんな人間になりたい

対話を始めるにあたって、まずKが他者と人係を築く時にどのようなことを考えているのかについて尋ねた。

(K：対話相手 S：筆者)

K：私はその、人に認めてもらえるような1個の能力はないんだけど、自分の中ではなんか、何にって言われたら難しいんだけど、ある程度のプライドがあるのね、1個、自分の中で。それはなんか自分の、なんか明るさだったりとか、ハキハキしたところだったりっていうのが、自分のプライドなわけだよ。

S：あーはいはい。

K：だから、そういうのを、たとえば仕事だったり、友達の前とか、たとえば大学とか授業の時とかも、発揮したいと思ってた。

(略)

K：それまで私、頭もそんなに良くなかったし

S：いやいや

K：洗足（学校名）もギリギリ受かったから、ホントに。なんか自分の中で人に認めてもらえるような能力っていうのが1個もなかったのよ。唯一それならいけるんじゃないかと思って。

S：なるほどね。

K：それを軸に生きていこうと思ったの、中学の時に。

K：だから、それこそ自分のプライドを誇示して、人を…だからなんかちょっとね、あれだと思う。ヒーロー的な感じになりたいんだと思う。

S：ああ。自分がたってあげたみたいな感じなんだ。

K：そう、イエスみたいな。わかる？

S：はいはいはいはい。集…

K：そう、ちょっと…

S：集まってきなさいみたいな。

K：みんな来なよみたいな。私の後光浴びなよみたいなところがあるんだと思う私は。ちょっとあの、偉い感じにしたいんだと思うよ。

Kは後に「ヒーロー的な感じ」「偉い感じ」を「カリスマ」という言葉で表現し、自分のテーマは「カリスマ性」であると話してくれた。Kには姉がおり、Kにとっての姉は常に羨ましく憧れの存在だった。自分よりも頭が良く「みんなから好かれてる」姉と比較して、自分には「人に認めてもらえるような能力」がなかったと言う。しかし、中学に入って自分の「能力」に気づくと、友達との関係においてもその「能力」を最大限発揮したいと考えるようになった。

この話を聞いて私は、Kが「お姉ちゃんのようにになりたい」「自分の良さを発揮してカリスマになりたい」など積極的な理由で人づきあいの方法を選択していることに気がついた。そして自分自身について振り返ってみると、私は人づきあいの方法を選択するのに「父のようにはなりたくない」「人と衝突したくない」など消極的な理由が多いことにも気がついた。

◇私の人間関係—こんな人間にはなりたくない

次に私の人間関係構築のスタイルについてKがどのように考えているかを聞いた。私はこれまでKと話をする中で、Kの姉の人づきあいについての話を何度か聞いたことがあり、なんとなく私とKの姉は同じように人間関係を構築するタイプなのではないかと感じていた。そしてKは姉のような人づきあいはしたくないとも言っていたため、姉の人づきあいについて具体的にどう感じているかについても併せて質問した。

K：あのね、お姉ちゃんの付き合い方は…なんかね、多分ね、あのね、言い方悪いかもしれないけど翔ちゃんと似てるのよ。

S：うん、全然いいよ。

K：誰にでも平等で、誰に対しても自分が下ですよってやってるのよ。

S：（笑）

K：ごめんね、すごい言い方悪くて。

S：ううん、全然。

K：それはいい意味なんだよ、私の中では。私はあなたたちを侵害しませんよ、弱い存在ですからっていう風に示すことで、結局人ってさ、弱い人間が好きでしょ？自分より。

S：ああ、まあね。

K：だから、なんだよ、お前入ってこいよ、みたくなるわけ。

S：ああ、はいはい（笑）

K：私はそれが嫌なの。負けたくないから。

S：ああ。

（略）

K：で、私が思うにね、翔ちゃんはそういうところを見せるのが上手い…見せるっていうか、ないのにね、全然下じゃないんだけど、そういう風にしてるのが上手いと思う。

K：だから人に、その自己提示が上手いのよね、あいつ（姉）は。

S：はいはいはい。

K：お姉ちゃんは別に能力がないわけじゃないんだよ。

S：うん、そう思うよ。

K：そこそこはできるはずなんだよ。（略）でも、そんで「私バカだもん」とか言ってるの。

Kは自身の姉と私の人づきあいについて、「全然下じゃない」「能力がないわけじゃない」部分を人に見せないことで意図的に「みんなに好かれる」ような自己を提示していると述べている。しかし、Kの姉についてはわからないが、少なくとも私自身に関して言えば、みんなに好かれたいと思ってそのような自己提示をしているわけではない。私はみんなに好かれる自分になりたいのではなく、人に嫌われる自分にはなりたくないのである。

◇好かれないと嫌われたくない

S：じゃあさ、たとえばKちゃんの中でだよ。Kちゃんの中で、たとえばじゃあAちゃんって友達がいいたとしてよ。AちゃんはKちゃんのことをすごい嫌いです。これマイナスだよ。 (図を描きながら説明する)

K：うん。それはマイナス。

S：でもBちゃんはKちゃんのことすごい好きです。じゃあAちゃんのKちゃんへの嫌い度がマイナス10、BちゃんのKちゃんへの好き度がプラス10で0です。この状態オッケー？

A (-10) →  ← B (+10)

K：うん、オッケー、オッケー、オッケー。全然可。むしろ私もうB！って感じ。A？フンって感じ。全然可。これは私にとって。

S：なんかわかってきた、わかってきた。

K：わかる？翔ちゃんはこれはさ、マイナスになるんでしょ？

S：そうそう。

(略)

S：だから、1人でもこういう人 (マイナスの人) がいたら…

K：そう、だめなんだよ。マイナスなんだよ翔ちゃんの人生は全て。私はこれ (プラスの人) で相殺されるんだよ。Bがいるから別に、Aはもともといなかったものとして捉えられるんだよ。

K：100人の中で考えるじゃん。そう考えて、じゃあ100の中で翔ちゃん好きな人が、リアル数字ごめんね (笑) ええと、今何人だった？100人か。だから、90人

翔ちゃんのことが好きで10人（自分のことを）嫌いな人がいたらさ、翔ちゃんさ、もうめっちゃ嫌ってなるでしょ？

S：10人にも嫌われてるって思う。

K：（笑）私はいや、90人にも好かれてる！カリスマー！って思うわけよ。

S：ちょっとまって、ちょっとまって。なんで？

K：え、だって好きな人がいるんだよ、私のこと。それでいいじゃん。AKBの総選挙みたいなもんだよ。

Kは「人に好かれたい」と思っているため、1人でもKのことを好きでいてくれればそれで問題ないと思っており、反対に私は「人に嫌われたくない」と思っているため、1人でも自分のことを嫌う人がいればすべてをネガティブに捉えていることがわかった。しかし、私が「こんな人間にはなりたくない」「人に嫌われたくない」という消極的な感情に捕らわれている理由まではこの対話から明確にすることができなかった。

◇本人にとっての幸せ

対話を終えた直後にKと私は、自分たちが卒業した高校の先生数名と食事をする約束をしており、その席で先生たちも交えて対話の内容について話した。以下は正式な対話活動として行われた会話ではないが、私のテーマに対するN先生のコメントがとても印象的だったので、引用したい。

N先生は私が卒業した高校の教師ではあったが、私はN先生の顔と名前をкаろうじて把握している程度で、高校在学中に直接話をしたことはほとんどなかった。私の性格や現状についてN先生は一切把握していなかったが、教師としていろいろな生徒と関わってきた経験から、私の消極的な態度についてN先生なりの見解を述べてくれた。

N先生：「こうしなきゃいけない」はつくらない方がいいと思うよ。

K：ああ。

N：うん。こう…まあ、目標があってそこから逆算していくことは大事なんだけど、でもこうなんなかった時ってこともあるじゃん。でも、だから、「こうしなきゃいけない」を作らない方が、いいと思う。

S：じゃあ「こうしなきゃいけない」と「こうなりたい」の差は、差は何なんですか？「こうしなきゃいけない」って思うことと「こうなりたいって思うことを逆算していくこと」の差。

N先生：でも、なりたいていうところから逆算はするでしょう。でも「こうしなきゃいけない」っていうのは、間違ってる場合があるじゃん。でも「こうなりたい」は間違っていないと思う。

S：ええわかんない。わかる？

N先生：自分がこうなりたいてって…

K：あのね、なりたいてって自分の意思でさあ。しなきゃいけないって結構他者から押し付けられたものって感じだよ。

N先生：そうそうそうそう。東大に行きたいと東大に行かなければならないはまた別じゃん。

S：うん。

N先生：うん。

S：でも、そんな自分だけの意思で全て成り立ってるんでしょうか、私の人生は。

N先生：ん？

S：でも、たとえば、親からのプレッシャーで東大に入らなければならぬって思ってたとして。その人にとっては親の期待に応えたいってことが第一の目標かもしれないじゃないですか。

N先生：だからそれをトータルで見た時に、試合はそこだけじゃないじゃん。人生だから。失敗かもしれないじゃん、それが。いやわかんないよ。成功かもしれない。でも、すごくそこは狭い状況での結果を求めていると思う。短期間で云々じゃん。でも、人生通して、東大に行かなかった方が幸せだったかもしれない。ひょっとすると、職人さんになった方が自分の持ち味が発揮できたかもしれない。

S：でもそれってわかりますか？東大目指してる時点で。

N先生：わかんない。それは、俺はわかんない。その子が東大に向いてるかどうかなんていうのは俺は全然わかんない。しかも、その子が東大に入りました、っていう（ことが）正解かどうか（の判断）は俺がすべきじゃないんだよ。その子が（良いと）思えば良い。うん。俺が教師になったことについては、俺はよかったと思ってる。でも周りは、たとえばだよ、お前は教師なんかなるべきじゃないって言う人もいるかもしれない。お前みたいな人間がって。だけどそれは、うるせえって話。俺が決めることだから。だから東大の結果も、それは本人が決めること。その子の東大が正解かどうかはわかんないよ。でも本人が東大に行ってよかったと思えば、それは俺はよかったと思うし、周りが東大に入ったからすごいっていう意見っていうのは1つの側面でしかなくて、正解か不正解かは、俺は本人が決めるべきだと思う。

N先生との会話場面を後から振り返って、私は自分の中で「こうしなきゃいけない」とことと「こうなりたい」とことの区別がついていないことに戸惑いを感じた。「東大に行きたい」と「東大に行かなければならない」が別の次元のものだという先生の話は今考えてみれば当然のことで、疑う余地は一切ない。しかしこの時点での私は先生の話に納得がいておらず、「東大に行きたい」と「東大に行かなければならない」は重なっているのではないかと繰り返す。つまり、私の「こうなりたい」という気持ちは、他者の期待に応えるために「こうしなきゃいけない」という強迫観念と重なっており、そのことが人間関係の構築に限らず、あらゆる場面で私を縛り付けているのかもしれないと感じた。

3. 結論

私は自分の「正しさ」以外は受け入れないという父の偏った見方が好きではなかった。自分の「正しさ」という檻から抜けられず、常に狭い視野で物事を見ている人だとも思った。しかし、今回KやN先生との対話を通じて、私自身もたくさんの「こうしなきゃいけない」に縛られていることに気がついた。人づきあいに関して言えば、周囲の人との関係の中で自分がどうなりたいかではなく、「人に嫌われちゃいけない」という「すごく狭い状況での結果」にしか目を向けていなかった。自分自身で「人に嫌われちゃいけない」という檻を作り出し、その中に入っていくことで自分自身の視野を狭め、その

結果として自分の好きなことややりたいことも見えないようになっていったのである。自分が作った「こうしなきゃいけない」の檻の中でひたすら他人の目に怯え、「狭い状況での結果」にしか目を向けてこなかった自分自身の姿は、私がこれまで嫌だと思ってきた父の姿とそっくりだと思った。N先生の言う通り、人生における「試合はそこだけじゃない」。「人に嫌われちゃいけない」というのも人生の一つの側面ではあるが、それに捕らわれているだけでは解決できない問題もあるということに、対話を通じて気がついた。

人が何かを選択する時、最終的な決断に至るまでに様々な前提条件が存在する。しかしそれらは初めから自明のものとして存在しているわけではなく、後から自分自身の思い込みで勝手に作り上げたものである場合が多い。その前提条件に捕らわれて何かが見えなくなってしまった場合は、勇気を出してそれを壊してみる作業が必要となる。私自身について言えば、他人の顔色をうかがったり、他者との「良好」な人間関係に執着したりすることを一旦やめ、自分自身を解放した状態で自分のことを考える作業が必要なのかもしれない。

4. おわりに ーこの活動の意味ー

「考えるための日本語」という授業での活動は、私にとって2つの大きな意義があった。まず1点目に、普段は人に話さないような自分の内面を他者と共有することで、自分が普段なんとなくしか意識していないことをより明確にし、さらにそれを言葉で表現することができた点である。「人と対立するくらいなら本音は話さない方が良い」とか「適当で当たり障りのない人間関係が良い」などと私が普段考えていることは、それ自体が私にとって「他者に伝えるべきでない」内容だった。つまり、普段他者に伝えられることもなく、私の頭の中だけに留められてきた想いは、いつの間にか私の中で「持つべきでない考え」「ふさわしくない考え」になっていたのである。しかし、対話やグループ活動を通じて自分が持っていた「最低な」考え方の背景にあるものがより明確になったこと、そしてその「最低な」考えを受け止めてくれるという他者の反応を目にしたことで、長い間「最低」だと思い、蓋をしてきた考え方と向き合うことができたのではないかと思う。

そして2点目は、自分の中のさらなる固定観念に気づくことができた点である。「こうしなきゃいけない」に捕らわれてきた私に気づいた時点まででこのレポートは終了する。しかし、そもそも私が「無難な人間関係」に固執するきっかけとなった父は、本当に私が思うような「孤独で人との対立を好む」人生を送ってきたのだろうか。私は父の強靱な精神力や頑固さが彼のビジネスを成立させるものだと考えてきた。しかし他人の考えを全く受け入れず、ビジネスにおけるすべての問題を自分の力だけで解決することができる人など果たしているのだろうか。父は私の目には届かないところで人と協力し、人と良好な関係を築くための努力をしていたのかもしれない。そう考えると、レポートを書くという作業は終了しても、自分の「テーマ」と向き合う作業はまだ終わりではないし、決して終わることはないのかもしれない。

*最後に…私の「テーマ」について一緒に考えてくれた Picari のみんな、そしてお忙しい中対話に付きあってくださった K ちゃんと N 先生に心より御礼申し上げます。

○大畠未来

私のライフデザイン

1. はじめに ―テーマ設定の動機―

私の母は、自分の母ながら、いわゆる「良妻賢母」であると感じる。料理が得意で、来客があるときには腕によりをかけて作った料理を振る舞う。また、趣味の一つが手芸で、私が幼いころには、私や妹の洋服を手作りしてくれて、それを着た私たちは、周りの人たちから自分の洋服を褒められるたびに、誇らしく思ったものだった。ガーデニングやフラワーアレンジメントも好きで、春になると庭には花がたくさん咲き、家の前を散歩している人々が、私の家の花の話をしているのを耳にすることができる。母は、近所付き合いも上手く、農家をしている方から野菜をもらったり、園芸が好きな人たちと花のやりとりをしたりして、周りの人からも、「良いご近所さん」であると思われているのであろう。家族をどこかに車で送って行かなければならないときは、どんなときでも快く車を出してくれて、自分のしたいことよりもまず、ほかの人のために行動するような人物である。

一方、私は手先も器用ではなく、料理もそれほど上手くはない。どちらかというところ、読書やピアノの演奏といった、自分ひとりでできて誰の役に立つこともない趣味を持っているばかりで、それほど愛想が良いというわけでもない。したがって、私が何年かして母親という立場になったとき、自分の母親のように振る舞うは考えにくい。もちろん、私は自分の母を、母親として好ましい人物であると思っている。しかし、将来、自分が母と同じような生活を送りたいと考えているわけでも、まして、母が私に、自分をお手本とした主婦になることを期待しているわけでもない。

そもそも、私は家庭を守るよりも仕事をするタイプに見られることが多い。高校生の頃に、クラス内で「キャリアウーマンになりそうな人ランキング」で第2位であったことをはじめ、友人も先生も、「働く私」としても将来を想像していることに、折に触れて気付かされていた。そのようなこともあってか、私自身も、仕事をしていない自分の将来を想像したことはなかった。昨年の夏休みには、APEC-WLNという経済界における女性リーダーの会議のサイドイベントが早稲田大学で行われ、そのスタッフとして参加したが、その理由の一つには、自分のキャリアを考える手助けになればという考

えがあったからである。さらに、現在、中学校、あるいは高校の国語教員を目指して勉強している。教員が女性であっても男性と同じように働きやすいであることは、教員になりたいと思う第一の理由ではないとしても、その点に魅力を感じてはいる。

振り返ってみれば、幼いころから、勉強でもスポーツでも芸術でも、誰にも負けたくなかった。負けず嫌いで自己主張も強く、自分の思うようにならないとすぐに泣いてほかの人を困らせていた。そして、高校生になると、最も負けたくないのは自分自身になった。高校受験で失敗した自分自身の弱さに負けたくなくて、大学受験のための勉強を、それこそ、友人関係よりも何よりも優先した。そんな姿勢は「家庭的なお母さん」よりも、キャリアウーマンとしての将来を容易に想像させるものであり、自分自身としても、自分のために仕事に自分の生活を捧げることに疑いはなかった。

しかし、ふと、自分が結婚したあとのことを考えたときに、漠然と持っている理想の家庭のイメージが、自分が専業主婦として家事をし、夫が外で働き、子どもたちが学校へ行っているというものであるということに気付いた。考えるともなく自分にとっての幸せな将来を想像するとき、自分が仕事に打ち込んでいる姿は想像できない。そうかといって、仕事と家庭を両立させられる自信もない。つまり、現実としての自分の将来像と、理想の将来像が異なり、このまま将来に向かって進んでいったところで、決して幸せになることはできないのではないかと考えた。

2. 対話報告

対話活動は、次に対話のパートナーに選んだ理由を示す2名と行った。Eさんとは2回対話を行い、Eさんとの1度目の対話と2度目の対話の間の期間に、Mさんとの対話を1回行った。

《パートナーとして選んだ理由：Mさん》

Mさんと出会ったのは、昨年の夏に行われた「APEC-WLN サイドイベントシンポジウム in 早稲田大学」というイベントである。このイベントは、女性の経済活動への参画を考えることをテーマに、経済界で活躍している女性の方々をパネリストに招いて、講演会やグループセッションをするというものである。Mさんも私も、イベントの広

報や来場者のおもてなしを企画するボランティアの学生スタッフとして参加した。一緒に活動するうちに、実は趣味が合うことや、同じ高校出身であったこと、そこで同じ先生にお世話になったことがわかった。その縁で、イベントの運営が終わってからも定期的に会うようになった。

知り合ったきっかけが女性のキャリアを考えるシンポジウムのスタッフを通してであったので、将来について真剣に話しやすいというのが主だった理由である。加えて、同じ女子高出身で、高校時代に培った女性のキャリアに対する考え方にも共通するものがあるのではないかと、さらに、共通した興味やバックグラウンドを持っているとしても、実際に就職活動をしている先輩だからこそ見えるものは私とは異なっているであろうという思いから、Mさんと対話しようと考えた。

さらに、Mさんはフランス文学を専攻している。Mさんはフランス文学だけでなく、日本文学にも造詣が深く、大学で日本文学を勉強している私と話が合う。Mさんの勉強への取り組み方や、文学の話をしているときの様子からは、明らかに文学への愛が感じられるが、Mさんはしょっちゅう、文学なんて一文にもならないと口にする。さらに「一文にもならないことを勉強するのって贅沢ですよ」と、文学の勉強を享受していることをうかがわせる。一方の私は、そのような割り切った考え方を持っておらず、最近になって、日本文学を勉強することに疑問を感じるようになった。もちろん、文学の勉強は非常に興味深く、大学での活動の中で最も充実感を得られることの一つであると感じている。しかし、就職活動が現実味を帯びるようになった今、どんなに一生懸命、国文学科生として文学の勉強をしても、実生活には何の役にも立たず、まして、就職活動や民間の企業に入ったあとに役に立つことなど少しもないという考えが頭に浮かぶときがある。もともと、「大学での勉強が必ずしも卒業後の仕事に直結するとは限らないなら、大学時代くらい好きなことを勉強したい」という動機で、国文学科を選んだこと、第一志望の職種は国語教員なので、今、しっかり勉強しておくことは、卒業後、専門的な教科教育を行う上で必ず役に立つであろうことを考えると、文学を勉強することへの疑問は空虚なものであり、現実に向き合うことから逃げているだけであるのかもしれない。しかし、たとえ民間企業に進むことを第一志望としていた昨春以前でも、このような疑問を持つことはなかった。そこで、Mさんとの対話を通して、文学と就職に向き合いたいと考えた。

《パートナーとして選んだ理由：Eさん》

大学の同じクラスの友人で、一人目の対話のパートナーであるMさんとの対話本番のために、対話と録音の練習に付き合ってもらった。

同じ学科・同級生・同じ高校出身という共通点があり、似たような考え方ではないかと考えていたが、対話の練習を通して、意外にもEさんは私とはかなり異なった職業観・将来像を持っていることに気付かされた。さらに、改めて録音した音声を聞いたところ、たった30分間の対話練習にも関わらず、私が質問をしたときだけでなく、Eさん自ら自分の家庭や将来について話をしていることが見受けられる場面が多々あった。それは、録音をしているというプレッシャーがあるからであるとも思うが、同時に、Eさんも私と同様、「今」この時点で、将来について深く考えることがあるのではないかと感じられた。そこで、改めて対話をすることで、Eさんの考えを深く聞きながら、自分の考えを深めたいと考えた。

<対話パートナーから見た私のイメージ>

はじめに、Mさん、Eさんそれぞれに、私が将来どのような生活を送りそうに見えるか、それぞれのイメージを尋ねた。

対話相手のEさん（以下E）：正直に言っているの？

私：うん。

E：2、3年バリバリ働いて、とっとと相手見つけて結婚して家庭に専念しそう。

私：どうして？

E：大学入ってからすごくいろんなことやってるじゃん。すごく面倒見が良いっていうイメージがあるのね。

私：面倒見が良い？そうなのかなあ。

E：だから、仕事したらすごくできるんじゃないかと私は思ってるんだけど、でも、子供ができたならそれに専念しそうな感じがするなあ。別に、嫌な意味では全然ないんだけど。それで、もう一回社会に戻ろうっていう風にはならないんじゃないかな。すごく良い家庭を作って、旦那さんがいて、子供が2、3人いて、っていう良い家庭を築きそうなイメージ。なんかは、「ただいま」って帰ってきて、「ごはんよー」って返ってくる感じ。

私：そういうことって、初めて言われた。私、自分のことそういう家庭的な感じじゃないなって思ってたし。ちょっとびっくりかも。

E：わかんない。

私：わかんないけどね。

E：でも、そういうイメージ。でも、その枠に収まらないかもしれないけどね。

私：どんな枠？「ただいま」って言ったら、天井から出てくるとか？

E：違う！なんか方向性が違う！まあでも、私も実際、理想としては「ただいま」って言ったらごはんが待ってるみたいな。まあ理想だよな。

対話相手のMさん（以下M）：本当にイメージなんですけど、学校の国語の先生とかやったら、こういう先生に会えたらすごくうれしいなって思います。文学の話をちゃんとしてくれる国語の先生って、良いですよ。自分の専門ジャンルをきちんと説明できない先生って、すごくいると困るじゃないですか。自分の専門ジャンルをきちんと語れる教養のある先生が一番ほしいです。

私：そういう先生になりたいです。結婚しなそうとか、すぐ結婚しそうとか、どう思いますか？

M：すぐっていうか……結婚しなくてもきちんとしているけれど、結婚してもいいお母さんで家庭を守っていくような。なんにでもなれそうな感じですよな。服屋さんとかでもよさそう。

私：服屋さんですか？

M：ショップ店員でも、本社でもどっちもできそうなイメージですね。人当たりが良いし、接客業が良さそう。

私：私って、キャリアウーマンタイプって言われることもあるんですが、そうなんですか？

M：キャリアウーマンって、偏見かもしれないですけど、ちょっと怖いっていうか、ツンケンしているっていうか、「世界のすべてが私の敵」みたいなイメージがあって……

私：肩で風切ってるみたいな？

M：そうです、そんな感じです。みくちゃんはそんな感じではなくて、適度にうまくやってくっていく感じなんです。こんなこと言うと、キャリアウーマンの人に怒られちゃうかもしれないですけど。

私：高校生のときのアンケートで、キャリアウーマンになりそうな人ランキングにランクインして、そういう風に見られてるのかなーって思っています。

M：キャリアウーマンっていうか、単に、できる女とか、何でもできる人みたいな感じじゃないですか。

私：うーん。レポートの動機にも書いたんですけど、私の母親はそういう感じじゃなくて、趣味がガーデニングと手芸と料理と、という人で……私は全然そんな人間じゃないんですけど、私の理想の家庭は専業主婦で、子供が帰ってくるのを待っていて……って思っています。だけど、私にはそういう人にはなれないなとも思っています、そこにギャップを感じてしまって今回のレポートを書くことにしたんです。

○考えたこと○

家庭的なイメージを持たれていることが意外であった。ただ、Mさん、Eさん両者の発言を通して、働いている私は想像がつかないということもないということがわかる。このことから、今まで、大学での勉強や課外活動を通して、私が「できる女」というイメージを語ることが褒め言葉、あるいはお世辞になる状況には会うことは多々あっても、私が家庭的な母親になりそうであると語ることが褒め言葉になるという機会

に出会って来なかったために、家庭的な私としての他者からのイメージを耳にする機会が少なかつたに過ぎないのかもしれないと考えた。

<女子高で得た仕事観>

偶然ではあるが、MさんもEさんも、私も同じ女子高に通っていた。MさんとEさんは面識がなく、私自身もEさんと知り合ったのは高校時代であるが、当時は顔見知り程度であり、Mさんと知り合ったのは、前述のように、大学入学後である。したがって、MさんともEさんとも高校時代に、働く女性についての考えを共有したことはなかった。

E：理想とは別として、まあ仕事はすべきだと思う。

私：それって、高校のときとかにも言われた？私は華道部だったんだけど、お花の先生にずっと言われてて。お花の先生は国語と社会の教員免許を持ってるの。一回国語の教員になって、でもやっぱり国語教育に疑問を感じて、早稲田に入り直して、社会の免許を取ったの。そのときか後かはわかんないんだけど、パリに留学してから、また結局学校の先生をやって、その先生はおばあちゃんなんだけど、40代くらいのときにお花の先生の免許——師範かな、をとったの。それで、「女の人も仕事を持っていないと」っていつも言われてて、洗脳されてる感があった。

E：女子高って、そういうこと言う人いない？女性の先生多いしさ。

私：女子高だったことって、自分の将来に関係していると思いますか？

M：良いか悪いかってことですか？

私：女子高だったから、女子の自立を進める教育みたいなイメージがあるっていう人もいて。

M：多分にあります。

私：就職で、男女差別っていうか、男女の差を感じることは？

M：差……差は、うーん。感じることはありますけど……警察官だったら、採用人数は圧倒的に男性の方が多くて、そういうのはあるんですけど、差って考慮しないといけないとは思いますが。男性と女性でまったく同じ仕事を与えられたら困っちゃうじゃないですか、お互いに。

私：たしかにそうですね。

M：なんで無理して一緒に考えようとするの、っていうのが多分にあるので。差別、差別ってそんなに意識されても困っちゃうんですけど。

私：適性が違うからですか？

M：そうです。

私：全部おんなじにすることが良いわけじゃないなとは思いますが。

M：そうなんです。そういう意味でも女子高行ったのは良かったな、と。

○考えたこと○

Eさんは、女子高で将来観について影響を受けたかという質問に対して、女子高で働く女性像が強調されると考えた場合に想定される理由を探しはしても、Eさん自身が、ことさらにそれに影響を受けたということはないようであった。それは、Eさんが働く母の姿を見て育ち、高校入学以前から、社会人になったら働くことが当然であるという考えを持っていたために、とくに女子高で学ぶことによってこのことを意識させられはしなかったことが理由であると思われる。

一方、Mさんは、男女差を考慮して区別されることは必要であり、女子高に通っていたからこそ、社会において男女が区別される場面があっても、それをすんなり受け入れることができると言っていた。

女子のみの学校というのは、男女がほぼ同数である日本全体の人口から見たら特殊な空間である。そうであるからこそ失われるものもあれば、学べることもあるが、最も身

近な大人の女性である自分の母親が働く女性のイメージを持っていなかった私であるからこそ、女性が働くことについて考えさせられる場であったのであると気付かされた。

<働く理由>

E：私は専業主婦っていうのにはなりたくないと思っていて、それは、母がそうだから、専業主婦じゃなくて働いているからっていうのもあるんだけど、やっぱり、社会的には女性って、結婚もしたいし、子供も産みたいしってなると、専業主婦になるっていう選択はあると思うんだ。友達にも、実際、早く結婚して、家庭に入りたいてって言う子もいるのね。でも、男女共同参画社会とか言われてるけど、やっぱり私は、女性は働いていくべきだと思うのね。大学でも、女の子がどんどん入って来たりするじゃない。女性が社会に出て働くことって必要なことだと思うんですよ。やっぱり、親とか見てもすごい楽しそうだし、子育てもそうかもしれないけど、両立できないものじゃないっていうのは例を知っているから、やっぱり、できるならすべきだと思う。

私：楽しそうだから働きたいの？

E：楽しそうだからっていうのもあるし、親の仕事は若干特殊だけど、やっぱり、結婚って永久保証じゃないじゃん。そういうときに、例えば、連れ合いの人と離婚したりとか、亡くなったときに、自分ひとりで生きていくってなったときに、ある程度仕事経験あった方が良くと思うし。一生、親の脛かじっていくわけにはいけないしさ。

私：お金を稼ぐために。じゃあ楽しいっていうのと、お金を稼ぐために仕事するの？

E：そうだよね。実際の問題として。

私：じゃあEさんは、仕事一筋じゃなくて、普通に、男の人と同じように働きつつ、でもちゃんと家庭も見たい？

E：縁があったらね。子供は好きなんで、自分の子供を産むかどうかは別として、やっぱり、老いてから独りっていうもの怖いし、今のところは別に、積極的に結婚したくないとは思ってない。

対話をしているうちに、Eさんは、社会人になったら働きたいという強烈な思いがあることに気付かされた。

E：親には年がら年じゅう自立しろって言われてるけど。まだ就職とかって、あんまり具体的には考えたことないけど、今、日本語のボランティアで就活のための日本語のクラスに入っていて、「ああ、こういうのしなきゃいけないんだな」っていうのは思う。

私：こういうのって？マナーとか？

E：マナーとか面接とか、自己PR文って、こういうの言わなきゃいけないんだとか。そういう人が近くにいると、実感が湧いてくるっていうか。いつかこういう風にしなきゃいけないんだなって。

私：仕事をしたいってずっと思ってた？高校入学前とかから。

E：思ってたっていうか……親に洗脳されてるっていうのは大分あって。じいさんは仕事してるんだけど、ばあさんは半専業主婦みたいな感じ。で、ずっと家にいるのね。それは大正生まれだからしょうがないんだけど。うちの母の感覚としては、うちに帰るとうちに誰がいるっていうのがいやだったのね。常に見られてる感じで嫌だったんだって。それで、自分がそういう状況になって、仕事するっていう選択をしたときにその方が良かったし、世界が広がったっていうのね。だから、ほんとに、物心ついたくらいの頃から、「お前は大きくなったら仕事しなさいね、自立しなさいね」っていうのを散々言われているの。それで刷り込みっていうのはあった。それはもう否めないところだし、何を排除しても残っちゃうんで、どうしようもないんだけど。それはもうやっぱり親の影響っていうしかない。

私：じゃあ、もし、結婚したら、夫婦で働いてたら、家事も分担しなくちゃだったりするじゃん。どう分担してやる？

E：分担……できれば、良いな。ただ、うちの今の状況としてできていないので。手が空いた人がやれば良いじゃん、片付けができないっていう。だから、片付けができるお嬢さんを見つけないとね（笑）料理とかはどうしても良いから片付けしてほしい。

私：片付け！私の父親が本当に片付けられないから、イライラしちゃってね。靴とか服とか脱ぎっぱなしだし。フリーダム過ぎるし、ほんっとに嫌だ。

E：靴はうちもフリーダムだけど、散らかってるけど生ごみの処理だけはしてるよ（笑）清潔にはしておきたいよね。

私：きっとEさんのうち、みんなでやってるんだよ。

E：タごはんだけは、手の空いてる人が必ず作るんだよ。だから、仕事はしたいけど、そのときになったらどうなるかわかんないけど、こっちだって、自分の就きたくて就いた仕事を諦めるかって言ったら、諦められないと思うの。

私：やっぱり、ライフワーク的な仕事に就きたいってことだよな。

E：やっぱり、就けるんだったら就きたい仕事に就きたいよね。今の女性って、一般論で言っちゃうんだけど、就職して、2、3年で結婚して子供を産んでってなると、一番仕事が楽しい時期に子供を産むことになるじゃない。そう考えるとやっぱりそれってもったいないのかもしれないなって思う。それを機に辞めちゃうとなると。

私：逆に、「仕事はただお金を稼げればいいや」っていう人なら……たぶんEさんの中の前提で、就きたい仕事に就いて、仕事はすごいやりがいがあって、と思ってるっていうのがあると思うんだけど、もし、べつに仕事の中身はどうでもいいけどお金は稼がなきゃだし、っていう人なら、プライベートが充実してればいいわけじゃん。そういう人はどうなんだろうね。

E：子育てって、そんな楽しいのかな。

私：え、楽しいでしょう。わかんないけど。

E：楽しいとは思うんだよ。幼稚園くらいまでは良いよ。迎えに行ったりとか。学校行っちゃったら、行ってる間やることなくない？

私：ないね。ない人はないんじゃない。趣味とかない人は。

E：趣味するくらいだったら、仕事した方が良くない？

私：それは人によるよね。

E：仕事っていっても、種類はいろいろあるけど、ガチで朝から晩まで働くっていうんじゃないなくても、パートでもなんでも、それってやっぱり必要だと思う。昼間やることがないなんて、そんな。

私：私の母親は、私が小学校4年生くらいまで、ずっと仕事してなかったけど、バレーボールとかバドミントン行ったり、カルチャーセンターとか行ったり、服とか作ったり。あと、お花植えたりするのが好きだから、そういう感じだった。

E：ほんとにこれは、親の受け売りみたいなこともあるんで、やっぱり、自分自身でそう思っているかということ、実際、どうなんだろうというのはあるんだけど、本当に物心ついたころくらいからずっと、耳にタコができるくらい言われているから。でも、それもあるし、それしか見てこなかったっていうのもあるから、私は、私もそういう風になるんだろうなとは思っている。やっぱり、うち帰ってきて親がいないと楽なんだよね。好きなことできるし。自分の部屋に閉じこもるっていうことができないから。まあ、親の考えの受け売りって言われちゃったらわかんないけど。まあ、実際、そういうことになってみないとわかんないけどね。

私：そう！それはそうなんだよ！仕事が面白ければ仕事するし、つまんなかったら仕事辞めるし、お金がなかったらもちろん働くけど。そのときになって、有利な方っていうか、良い方を選ぶな、と思ったの。

Eさんとの対話を通して、たとえば「仕事」や「専業主婦」という言葉一つとっても、大きく異なるイメージを持っていることに、改めて気づかされた。それを踏まえてMさんと対話したとき、Mさんは、強烈に「仕事」をしたいという意思があるわけではないことがわかる。

私：Mさんは、卒業してすぐ就職するんですか？

M：そうですねー。就職できたらするなーと思います。

私：公務員ですか？

M：公務員、できればなりたと思うんですけど、もしダメだったら、院か、わけわかんないですけど留学か。

私：フランスに？

M：そうです。でも、自分でブラブラしながら独学で公務員目指すかもしれないです。どうだろう。さて、あんまり誠実な答えではないかもしれない。

私：それなら、どうして公務員になろうと思ったんですか。

M：地元が好きだからかもしれないですね。新宿区で働きたいなって思っています。大学が割と好きだったので。一番の理由は、安定してそうだからです。

私：文学の勉強を仕事とつなげようとは思っていなかったんですか？

M：それもあるんですけど、それだところ、とんでもない貧乏暮らしをしなければいけないじゃないですか。すごいダメな考えですけど、こんなこと言うと最低なんですけど、「まじ貧乏暮らし無理！」っていう感じで。どんなに貧乏になっても、自分の夢を叶えたいっていう人もいますんですけど、そういうのはちょっと無理かな。適度においしいもの食べたいし、コスメおたくなので、肌荒れしたら生きていけないなと思って。最近、受験で夜更かしが多いので、そろそろヤバイです。お金かけてるからだと思うんですけど、母親が私より肌がきれいなので。「私はお父さんと結婚してあげたのよ」って言って、美に対するモチベーションがすごいなと思います。

私：すごい！そこまで来るとすごいですね。

M：もし私が母親の年齢になったときに、確実に母親より不細工だから、この上、肌まで汚かったら生きていけないなと思って、私の母親が——子供の私がいうのもあれですけど、相当美人で。自信満々すぎて、ときどき何ていやな女なんだろうと思うこともありますけど、こんな歳の子供がいるようには全然見えなくて、会社の上役にお菓子もらってきたりとか、年齢が上な人向けの雑誌の人とかにも声かけられたり。美人って言っても都心のマダムみたいな感じでは全然なくて、わりかしきれいな感じです。でも美人じゃなくても、肌とかきれいにしてればそれなりにきれいに見えると思うんですけど、苦労しているとやっぱりそうはいられないじゃないですか。若いうちの苦労は買ってでもしろって言いますが、そんなの絶対嘘ですよ。苦労しないで生きていける人が一番偉いと思います。本当にごめんなさい（笑）

○考えたこと○

ある言葉に対して、ひとそれぞれ異なるイメージをもっていて、それを相手も同じように考えているとは限らないという意識のないまま用いていることに気付かされた。

まず、「仕事」、より正確に言えば「自分が就く仕事」について、Eさんは、口に出していたわけではないが、仕事というものは就きたい仕事でやりがいのあるものであるという前提をもって話をしているのがわかった。一方、私に関して言えば、「仕事」に必ずしもやりがいを求めてはおらず、単なるルーティンワークであったとしても、仕事以外の生活が充実していれば良いと思っている。たとえ仕事の面で充実していなかったとしても、仕事はお金を稼ぐためのものであると割り切り、自主的にイベントの企画運営に携わるなど、何らかの形で社会と関わりながら生活を充実させることは可能であると考えためである。これをより強調したのが、Mさんの、仕事はお金を稼ぐために必要なものであり、金銭的に十分に満足できる生活ができるだけの収入があれば働かなければいけないという考えであると思う。

次に、「専業主婦」についてであるが、Eさんは、暇で仕方がない存在として専業主婦を見ているようであった。おそらく、働く母親の姿を見て育っているために、そう感じるのであろう。しかし、私の母親が専業主婦であった私が小学校低学年の頃のことを改めて思い返してみると、退屈そうであった印象はない。それは、母親がいつも自分の趣味である手芸やガーデニングをしていたり、スポーツをしに出かけたりしていたからである。つまり、自分が専業主婦になることに良いイメージを持たないEさんに対し、私が専業主婦になっても良いと考える根拠となるのは、充実しているように見受けられる専業主婦であった自分の母の姿であったことがわかる。

<理想の家庭・子供の幸せ・ひとりの時間>

Mさんは働くことが必須ではないとは言うものの、MさんもEさんと同様に、母親が働くことを好ましく思っていることがわかる。

M：私は鍵っ子だった時期があったんですけど、それはそれで楽しかったです。子供を大切にしていればそれで良いんじゃないでしょうか。

私：そうですね。家にいて、子供を手厚く世話することだけが子供を大切にすることじゃないですね。

M：生々しい話ですけど、共働きで金銭に余裕があるっていうことも、幸せのひとつだと思うんですよ。お金がない、お金がないって言い続けて、かつ、子供におもちゃとかも買ってあげられないという生活よりは、お金持ちで子供にもどんどん買ってあげちゃうくらいが良いなと思います。

私：いやいや、それは駄目でしょう（笑）まあ、ある程度、習い事をやりたいって言うのに、お金がないせいでやらせてあげられなかったらかわいそうだなと思います。

M：あと、自分の母親が外で働いていて、「この化粧品が良いのよ」とか、「どここのケーキっておいしいんですって」とか聞いてきたのを見ると、働くのも悪くないなと思います。

私：そうですね。

M：家のなかでこもっちゃうと、近所の人と仲悪いと悲惨なことになりそう。お母さんが働くのも楽しくて良いと思います。みくちゃんの子供はきっと幸せになると思います。そういうことを親が考えてくれるのは嬉しいことですよ。

必ずしも、いつも家にいて子供を手厚く世話することだけが、子供のことを思うことではないということに関連して言えば、Eさんとの対話では以下のような話が出た。

E：働いてても、子供には自分が作ったご飯を食べさせなきゃいけないという信念が、うちの母親の中にあるの。だから、買ってきたものを食べることもそんなになかったの。母の中には、想像だけど、確固たる信念として、子供には親の作ったものを食べさせなきゃいけないというのがあるんですよ。

私：それは良いね。ご飯は必ず作るっていうのはすごい良い。

E：だから、今でも外で食べるのは友達と食べるときくらい。遅くなっちゃったら、自分で作るか、食べないで寝ちゃうか。片付けも何もできないけど、ごはんだけはちゃんとしてる。

いつも母親が家にいるわけではなくても、「食事は親の手作りのものを」というルールがEさんの家庭内で、家族をつなぐために有効に機能していることがわかる。そのような、Eさんの働く母親像は以下の話に見える。

私：Eさんのお母さんってずっと仕事続けてるの？

E：ずっとではないですね。ここ10年くらい。

私：Eさんは、結構、親を見習って、っていう感じだと思うんだけど……

E：私自身、将来を真剣に考えるっていうことをしたことがないんだけど、やっぱり親っていうのは常に前にいるものじゃない。私の場合、それしかないわけですよ。やっぱり、家庭の中にそれしか大人がいないわけだから、親の話を聞いて育てて、矯正されてるところはあるかな。結局、そういう風に考えたときに、母は私が物心ついたときから、ずっと朝から晩まで働いてて、家から職場が近いっていうのもあるけど不自由だと思ったことは一度のなかったの。職種として特殊なものもあるんだけど、不満を漏らすことはあっても、やっぱり楽しそうなの。

私：楽しそうっていうのは良いね。

E：だから、私に関していえば、専業主婦ってなんだか知らないわけ。友達のお母さんで、専業主婦の人はいるけど、家にいつも親がいるわけでしょ。私の場合、親が家に帰るといつもいないから、ひとりの時間があるほうが、精神衛生上、良いよね。

私：じゃあ、やっぱり、子供にもひとりの時間が必要だし、親が働いてた方がひとりの時間が持てて良いのかもね。

E：私の場合、自分の部屋があっけないようなもので、親が家にいるときってというのは、常に親と話してるから。今はそうでもないけど。

私：ずっと親が家にいても、自分の時間がもてなくなっちゃうから、親が働いていた方が良いて言ってたじゃん。親が働いてるかどうかで面白い。自分の部屋にいれば、親が家にいてもいなくてもおんなじじゃないのかなって思って。

E：親が家にいなかったら何でもできるから。パソコンとかテレビとか、居間にあるし。親が嫌なわけじゃないけど、息がつまるっていうか、世代が30年違うとわかりあえないことってあるでしょ。ひとりだけとか、兄弟とだけの時間って、大切なのかな。

私：確かに、今、家に帰るのがいつも遅いから、私に家にいるときってというのは、いつも誰かしら家族も家にいるの。そういえば、家に誰もいない時間がほしいなって思うことはある。自分の部屋にひとりでも、ほかの家族が家にいるかいなくて意識しちゃう。

E：そうそう。

私：ひとりの時間って、自立に必要なのかな。そういえば、前に、「ただいまー」って帰ってきたら、お母さんがお夕飯作って待ってるみたいな理想像を言ってたじゃん。Eさん家庭はそういうのとは違って、でも、理想的なわけでしょ。その、「ただいまー」云々っていうの、それって、悪いってわけじゃないけど、何から来るんだろう。やっぱり、ドラマとか？

E：うーん。ドラマとかアニメとか。私自身はそういうことは一度もなく、だから余計に現実味がないし、これは一般論かもしれないけど、少し前まではそれが普通だったわけじゃん。お母さんが働いてないのが、今の私たちの親の親の世代。まあそうだよね。でも帰ってきて、5時とかだよ、そんな時間に夕飯なんて考えらんない。

私：そうだよね。いくら家族そろって夕飯でも7時過ぎだなあ。うちなんか全然そろって夕飯食べられないよ。小さいころから基本的にバラバラ。Eさんのうちは夜9時とかでも、そろって食べるの？

E：うちは長いことご飯を作る人が親しかいなかったの。だから、親が帰ってきた時間がごはんの時間だったから。でも最近は私とか妹も作るようになったから、いつもそろってってわけじゃないけど。

私：Eさんのうちって役割分担できてる感じが良いよね。たぶん、Eさん、うちの状況を想像できないよ。なんか、うちの母親って、わけわかんないんだけど、たとえば、親が家にいるときに洗い物とかしようとするじゃん、そうすると、めちゃくちゃ拒否されるの。親が仕事で私が家にいるときは、家事するとありがたいって言ってくれるけど。仕事を取られたくないのかなあ。別に仕事してるんだから、誰がやっても良いと思うんだけど。仕事してないんだったら、まあ、それくらい母親がやっても良いと思うんだけど。

○考えたこと○

私の母は、私が小学3年生の頃から介護の仕事を始めた。しかし、母のパートタイムの仕事は週に2、3日程度であり、帰宅時間も私とほとんど同じか、もう少し私より早いくらいだったので、私ひとり、あるいは3歳年下の妹と2人で家にいる時間というのはあまりなく、強いて言えば、長期休みのときに数日ある程度だった。

一方、MさんもEさんも、母親が働いていて家にいない時間を楽しんでいた様子がかがえる。「子供が学校から帰ってくると、家で母親が出迎えてくれる」というイメージは、一見、幸せな家庭の象徴であるかのように思われるが、もちろん、幸せな家庭を築くために必須のものではない。Mさんの話からは、子供を直接的に手厚く世話することだけが子供の幸せを考えることではなということ、Eさんの話からは、直接、子供と触れ合うことのできる時間が短いとしても、たとえば夕食は親が作ったものを食べさせるというような触れ合い方もあり、そういった子を思う気持ちがあれば、それはきっと子供にも通じるのであると考えさせられた。

そして、「家庭」についてのEさんと私との決定的な考え方の違いは、家族の役割分担であり、このことが、家庭と仕事の両立に対しての私の漠然とした不安につながることに気付いた。私の家庭の場合は、家事をするのは基本的に母で、それ以外の家族が家事をするとすれば、それは手伝いに含まれた。したがって、私の中には、家族で負担が均等になるように家事を分担するという考えがなく、将来、自分がどんなに仕事が忙しくても、一応、家事は母親がするものであり、仕事は必ずしなければならないものであるから、どちらかといえば必須である家事に集中した方が良いと考えていたのだと思う。しかし、Eさんの家庭においては、基本的に家事をするのが家族の中で手の空いた

人ということである。そういった形態であれば、家事と外での仕事を両立することは十分可能であると、考えを改めさせられた。

3. 結論

私にとって重要なことは、時と場、状況に応じて、どうすることが最も良いのかを考え、選択することであると考えた。ある目標や理想像を設けて、それに向かって進むことも大切なことではある。しかし、今の私にとっては、はっきりとしない理想像を無理に具体化しようとするよりも、今を、目の前のことを良く見て、現時点でどのように判断するのが、今、そして未来にとって最も良いのかを考えることの方が自分に合っている。特別に得意なことも苦手なこともない代わりに、いつも現時点の状況を最大限に活用して良い方向に持っていかうとする意識があることは私の強みだと感じているので、不可能ではないといえる。

具体的に言うならば、もし、家庭の経済的な理由で働かなければならないのなら働き、反対に、ある程度の経済的な余裕があり、とくにやりがいのある仕事がないというのなら、職は持たずに地域の活動などに精を出しても良いと思う。子供の自立のために、母親が外で働くことが必要であるならば、それも一つであり、働く理由はお金ややりがいに限られない。

そして、将来というものは、キャリアウーマンか、家庭的な母親かという二者択一でもなければ、「会社員」「主婦」というような枠組みのどこに当てはまるのかを考える必要もなく、自分が最も良いと思う配分で、仕事と家庭、あるいはそれ以外のことに力を費やせば良いのであった。

この活動を通して、「どのような社会人／主婦／母親になりたいか」と考えたときに、そのことばに対して自分が持っているイメージにとらわれすぎてしまっていたことに気付いた。つまり、肩書を設定して、それについて自分の将来像を考えるのではなく、その「どのような私になりたいか」「どのような私なら可能であるか」をまず初めに考えることで自然に見えてくるものが、私の本当の将来像であり、それは、実際に選択することが必要な場面に直面したら、そこで最善の選択をする私であると考えた。そして、他者に私がどのようなものであるかを尋ねれば、今も未来も、おそらく人それぞれが、あらゆる肩書や特徴を挙げるのが想像できるが、それはあくまで他者からの見方であり、私

という存在である以上、どのような見方を与えられたとしても、私というものそれ自体は変化することがない。つまり、私自身が自ら変わることや、他者からの見方を受けてそれに思うことがあって自ら変わることはあっても、ある見方が与えられることそのことが私を変化させるわけではないといえることに気付かされた。

4. おわりに ーこの活動の意味ー

この活動を通して得た最大の成果は、ことばで表現することで、自分の持つ固定観念を明らかにし、固定観念に正面から向き合うことができた点だと思う。たとえば、家族の役割分担に関して言えば、もちろん、家族で家事を分担することは一般的であり、難しいことではないことはわかっていた。しかし、それでも私が意識せずにいるところでは、家事は母親がするものという考えがあり、それが私に漠然とした不安をもたらしていたのである。

そして、さらに重要なことは、私と同様に、対話のパートナーや、ディスカッションのグループである Picari のメンバーそれぞれの固定観念を持っていることに気付くことができた点である。これは、授業でのディスカッションや対話を通してでしか気づくことのできないものであり、このような点で大変有意義な活動であった。

○桂（かつら）

常識の峰を越えよう

1. はじめに ―テーマ設定の動機―

私は幼い頃から周りの人が当たり前だとおもっていることについて、常に自分なりの考えを持つか、あるいは疑問を投げかけてきた。しかし、周りの反応は大体同じで、子供のくせに何を偉そうにというようなお説教が極めて多かった。しかし、当時はそのお説教で何を言いたいのかということさえ分からなかった。子供らしくないことを言ったことが批判されたのであれば、子供らしい言葉というのは一体どんな言葉なのであろうか。そうして、その反対側にある大人らしい言葉とはどのような言葉をさして言うのだろうかと疑問を抱いたが、それを口に出す度胸はなかった。

25年を経て、自分が大人になり、昔批判された言葉を口にしても説教される機会は少なくなった。しかし、やはり周りの人がそれぞれの常識に基づいて、何の疑念もなくすみやかに判断を下し、私を説得しようとしたり、批判しようとするが多かった。大学に入り、法律を勉強しはじめた頃からは、こうした疑問を抱く意識が益々強くなってきた。学部二年生の頃から、私は著作権法に関心を持ち始め、知的財産法科目を履修した。学んでいるうちにある疑問が生じ、先生に尋ねたところ、学力が不十分だからそのような素人発想をしてしまうのだと断言された。更に、周辺の人からもそれについては既に結論が出ており、通説になっているのだから研究しても意味が無いと散々批判されてしまった。

なぜ通説（常識）となっていることを疑うのは無意味なのか、もしおかしいと思うならば、例え常識でも徹底的に追求すべきではないのか。常識を疑い、そして自分の考えを証明していく過程にあたって、大切なのは最初の気持ちを貫くことだと思う。確かに、最初は素人のような考えに見えがちかもしれないが、あとで論理的に証明すれば自分の仮説が正しいかどうかも究明できる。単に通説について異論を唱えようとして、全員一致の強い批判を受け、問題をちゃんと分析する前にやめさせられることは、とても残念だと思えない。しかし最初の気持ちを貫くことは決して容易なことではあるまい。研究結果が不毛に終わる可能性と、想像を絶する学会一致の反対勢力とを恐れ、私はこうした追求をやめようと考え始めており、今でもさ迷っている。

この問題を解決しなければ、私は永遠に前に進むことができず、自分の道も拓けない
 と思い、このレポートを書くことを決めたのである。常識というものをできるだけ分析
 し、人との対話を通して常識よりもっと大切なことを探し出すことによって、自分に勇
 気をつけ、常識或いは通説を恐れずに、抱いた疑問の解明を貫徹できるようになること
 を願っている。

2. 対話報告

私の対話相手は自分の人生の師匠ともいえる方である。私が日本に来ることができた
 のはすべて師匠のおかげである。徹底的な反骨精神を教えてくださいました師匠は周りの人
 に異例と呼ばれるにも関わらず、自分の心に従い、65年の人生を送ってきた。今まで
 常識と戦ってきた彼の根底には私が持っていないものがあるはずであり、この対話によ
 って、自分の考えを確かめたい。そして、徹底的な反論も期待している。

《小見出し》

2-1. 常識は時代によって変わるものである。そして、保守的であり、変えなければなら
 ない。

2-2. 常識対「常識」

2-3. 常識よりもっと大切なものは好奇心と創造力である。

2-1.

師匠：社会はその秩序を守らなければならないと思いつつも、新しく認めなければなら
 ない法的な概念、要するに形成の訴によって新たな権利を形成、獲得する新しい訴訟
 というものが益々増えてきた、要するに新しい常識が増えているということだ。

私：新しい権利を認めてくださいという訴えが多くなってきたということは、社会の変
 化が大きくて、どんどん新しい常識が出てきているということですね。人々は新た
 な常識を主張し、裁判所で様々な権利を主張したいと思っているんですね。

師匠：そうです。例えば、昔の有名な形成の訴には日照権がある。都市化が進んでビルがどんどん建設されると、隣接する旧来の建物に日光が当たらなくなる。そこで、太陽の光をもらうのは住民の一般的権利だという主張が提起され、既存の建物の目の前に大きな建物を建てて、日光を遮るのは日照権の権利侵害だと訴えた。その結果日照権という新しい権利が認められた。例えその土地が自分の土地であろうとも、新築の建物によって隣接地住民の住居に差し込む日光を遮ってしまうことは、権利の侵害だという新たな常識が確認されたんだ。

私：その日照権のような新しい権利を認めることになったのは、社会の新たな変化に対応したからだということですか。

師匠：そう、法律秩序が変化している。つまり、そういう建物を立てはいけないのは常識になった。以前は、自己所有の土地に建築基準法に基づいて建物を建てるのに問題はなかった。

私：加藤さんが言いたいことは常識が時代によって変わるものだとのことですか。

師匠：新しい権利の形成というものはその裏には新しい常識が働いている。そして新しい常識が生み出されていくと同時に、旧常識は捨てられることになる。つまり絶対的常識は存在しない、あるのは相対的常識だ。

私：では、常識を変えなければならないと思っていますか。

師匠：常識といってもいろいろなことがある。しかし殆ど保守的要素が多い。例えば、中国において、なにをやらうとまずコネクションがあるかどうかからかんがえはじめる。世界第二経済大国になっているにもかかわらず、もののやり方まだ30年前とほぼ同じだ。

私：しかし、常識というものは時代によって変わるものと言いましたね。なんか矛盾している気がしますけど。

師匠：いや、確かにある一瞬画期的な変化があったかもしれないが、すぐに保守的になってしまう。

【考えたこと】

ある観念が常識であるか否かを弁明するには、社会における一般的認識、すなわち社会通念に左右される。しかし、この社会に現に存在しているコンセンサス、その意味で固定するものではなく、流動するものであるため、絶対的、一貫的常識は存在しえない。更に、社会通念という判断基準はあまりにも不明確であり、判断の主観性（個々人の判断による社会通念）が問題となりうる。時代の流れ、人々の観念に委ねる社会的コンセンサスに基づいて構成されてきた常識はそれほど神聖なものではないとも言えよう。そうすれば、例え常識というものが存在しても、それが相対的ものにすぎなく、時の経過によって、社会にそぐわなくなり、保守的になってしまうわけであろう。

2-2.

私：加藤さんはある常識が嫌いと思った場合、どうしますか。

師匠：自分で歩いて行くさ。自分が身を持って感じたことを自分の確信として自分の「常識」の中に叩き込む。そして平等な気持ちで戦えるだろう。

私：常識対「常識」ということですか。

師匠：そう、俺は小学校3年生の時、理由なんか特に覚えてないか、母親にお前は誰のご飯を食べていると思っているの、親の言うことを聞きなさいと言われたことがある。僕はすぐさま、母さんは小さい時に誰のご飯を食べていたんだ？と反論したことがある。結果、4日間何も食わずに水ばかり飲んでいたら、路上に昏倒したしてしまった。外に出て飯代を稼ぐことはできない子供に対し、あんな言い方で人を従わせようとするのは、どう見えても理不尽なことだろう。親たちは自分の考えを常識として言っている。しかし、僕の考え方も決して悪くない。それで自分の考えを自分の「常識」として確信して、常識対「常識」で平等で戦ってきた。

私：それが面白い発想ですね。初耳です。

【考えたこと】

私はある常識が嫌いと思った場合、ひとまずその常識に従い、内部から徹底的に分析し、あらゆる方法を尽くし、変えようとする。しかし、現実ではなかなか上手くいかない。常識に飛び込んで抗っていく過程で、困ったり、迷ったり、時折に認めたり、諦めたりすることもある。そして、社会のコンセンサスがやっと変わり、当初自分の考えと同じになったとき、最後まで自分の信念を貫けなかったと後悔する。

では、もし常識が前述のように絶対的のものではないとすれば、自分の考えはいつか社会のコンセンサスになり、常識になることもありうる。自分の思うことを確信するのは誰でもできると思うが、「常識」として信じている人はなかなか見えないのであろう。これは一見自己暗示のようなものであろうが、実は大変役に立つと思う。師匠は社会から離れ、嫌いな常識に干渉されないように様々なことを放棄した（人生、家族）。そこまでできる彼の根底には自分の常識という根っ子があるのであろう。この根っ子は常識に抗うには最も重要なものともいえよう。

2-3.

私：常識よりもっと大切なものが存在しますか。

師匠：好奇心と創造力

私：私は最初著作権法に好奇心があって、ある疑問を抱いて、研究しようと思ったが、いろいろな結果を想像して、やめようと思った。

師匠：なぜやめようと思ったの。

私：研究結果が不毛に終わるかもしれないからです。やはり通説に反対すれば、悪い結果を招く可能性が高いわけです。

師匠：君はある行動を取る前に必ず結果を想像するタイプかい。それが極めて危険な考え方だと思うよ。予め結果を想像して上手く行く帰納法は天才しかできないことだよ。新しい概念、君の場合は自説を作るのは演繹法によって行くしかないのよ。今の君はまさに考えすぎて、自分の頭の中で終わらせようとするのは結局一般的で保守的な結論に帰結しやすく、自分で自分の手足を縛ってしまった。

私：えっ、どういう意味ですか。

師匠：つまり、結果を決めてから行動したら、結果はやっぱりそうだった、そして終わってしまう。自分が批判されないようにある限度の中に想像する、突破しようとしても結局できなくなる。

私：じゃあ、加藤さんは今まで演繹法によって行動をとってきたのですか。

師匠：俺は予見したりしないよ。、いや、むしろ予見できないからだな。大学中退と中国に行くことは何も考えずにとった行動だった。もちろん、今から見れば結構時間がかかったね。

【考えたこと】

考えてみれば、確かに師匠が言った通りに私は行動する前に考えるタイプな人である。なぜならば、考えずに行動するのは無謀であることは幼い頃から教わってきたのである。しかし、結果を考えた後、後悔なく最後までやり尽くす人がいるとすれば、結果を想定した後、逆に行動することを恐れ、諦める又は戸惑う人（私？）も少なからずいるのであろう。なぜ最後は自分で自分の手足を縛ってしまったのか。私は常識（通説）が嫌いと思って、反抗したい（自説を作る）が、悪い結果になる（研究は不毛に終わる）のを恐れていることの裏には、何らかの考え方が機能しているかもしれない。もしそれは長年の間で育てられた常識（考えずに行動するのは無謀）ともいえるのならば、常識と戦うとは自分との戦いになりうる。いくら周辺の人に散々批判されても、それはあくまでも外部の圧力にすぎなく、諦めようとする理由にはなりえない。常識と戦おうとしたら、自分のすべての常識をぶっ壊さなければならない。結果を決めてから行動し、自分が批判されないようにある限度の中に想像するような中途半端のやりようは結局自分の手足を縛ってしまうのであろう。

3. 結論

もう一度イントロを読み、私は気づいたことがある。今まで自分を困らせているのは研究結果が不毛に終わる可能性と、想像を絶する学会一致の反対勢力とを恐れ、自分の追求をやめようと思うことである。そして、この問題をうまく解決するには、常識そのものを分析した上で戦うしかないと予め想定していた。しかし、よく考えれば、常識を

疑ったら、皆に反対され、失敗する可能性が高いという発想もう常識の守備範囲から離脱していない。

実はレポートを書くことによって、私は常識が存在しているかどうかさえ分からなくなった。もし存在しているというのなら、それは私の考え、つまり私見に過ぎない。逆に存在していないと言われても、それは言っている人の思い込みであろう。皆そう思っているからという言い方はよく聞こえるが、実はこの言い方が極めて無責任である。なぜならば、「皆そう思っているから」との考えはその人の思い込みに過ぎない、実際どれぐらいの人が同じ考え方を有しているのかは誰でも証明できないからである。結局、身内の人々の反応を見て、ある結果を想像する。しかし、例え身内の人々は同じ考え方を有していると言っても、すべての人とは限らない。裏返して言えば、例え身内の人々に反対されていると言っても、すべての人とも限らない。そして、それを常識として言う者は信用性が欠けている。最も、それを常識として捉え、恐れている者（私？）もバカバカしい。そして常識に抗ったら、失敗する可能性が極めて高いという「常識」も何ら説得力がない。

ふと気づいたら、今まで常識と戦ってきく過程には自分の思い込みと戦っている私がいる。すなわち、法律の場合において、通説を疑い、自説を作ろうとしたら、想像を絶する学会一致の反対に晒され研究結果が不毛に終わること自体は単なる心配性である私の思い込みにすぎないかもしれない。確かに、先生に学力が不十分だからそのような素人発想をしてしまうのだと断言され、周辺の人からもそれについては既に結論が出ており、通説になっているのだから研究しても意味が無いと散々批判された。しかし、それは物事の一つの側面であり、極端に言えば、賛同してくれる人も必ずどこかにいる。単にまだ出会っていないだけであろう。

常識そのものを分析することによって自分に勇気をつけるとの考え方は悪くないが、そもそもなぜ恐れる必要があるのかについて考えれば、よりよく近い道ではないのか。最も、常識の構造を分析したため、恐れる必要がないという結論に導くこともできないとはいえないが、常識に反抗したら悪い結果になるという心配を問題視して解いていくのは早道であろう。

4. おわりに ーこの活動の意味ー

振り返ってみれば、完成したこのレポートはそもそも何のために書くのかをもう一度確認したくなった。イントロ部分の最後では「この問題を解決しなければ、私は永遠に前に進むことができず、自分の道も拓けないと思いこのレポートを書くことを決めたのである。常識というものをできるだけ分析し、人との対話を通して常識よりもっと大切なことを探し出すことによって、自分に勇気をつけ、常識或いは通説を恐れずに、抱いた疑問の解明を貫徹できるようになることを願っている。」と書いている。では今の私は常識よりもっと大切なことを見つけたのか、勇気があるようになったのか、抱いた疑問の解明を貫徹できるようになったのか、以上の三つの問題に答えることができなかつたら、このレポートを書く行為自体がまさに無意味であり、不毛な作業になりかねない。しかし、この三つの問題が分離しているものではない、むしろ分離不可能なものともいえよう。これから、この三つの問題に答えながら、活動の意味を明らかにしたい。

まず、常識より大切なことを見つけたのかについて、対話中、師匠が好奇心と想像力と言ってくくださったが、私自身はそれについて深く考えておらず、鵜呑みにしなかった。というのも、もっと大切なことを気付いたからである。それは常識に反抗したら悪い結果になるという心配（長年の間で育てられた常識）を問題視して解いていくのは早道ということである。それは常識そのものを分析し、より大切なことを見つけることよりよい方法ともいえよう。

では、勇気があるようになったのかについて、常識と戦うとは自分との戦いであることに気づき、自分がなぜやめようと思った（弱気になった）の源（自分の思い込みにとられていたから）が解明されたことによって、私は今正々堂々前に行く勇気を身に付けたといってもよからう。

最後の目標として、自分が抱いた疑問の解明を貫徹できるようになったのかについて、常識を解明してから、貫徹できるようになったわけではなく、むしろ考え方の根本的な間違いを気付いたことによって、勇気をもらい、貫徹できるようになったかもしれない。

まとめていえば、今回の活動は私の研究に役に立つのみならず、ひいては、私自身がこれからこの社会でどう進めばよいのかを示唆した。最も、私と同じ迷いを抱く人に何らかの役に立てば願ってもないことである。

○中山真菜

「自律と共生」を目指した私の原点

ーパートナーシップとノンネイティブ教師の養成ができる日本語教師になることー

1. はじめに ーテーマ設定の動機ー

私は、幼少のころから、両親の結婚生活のあり方に疑問を持ち、兄や姉の国際結婚を通して、良い結婚生活を送るためには、パートナーシップを築かなければならない、そのためには、一人一人が自立していなければならない、と考えるようになった。大学時代に一年間南アフリカでゴスペルを学んだが、南アフリカでの経験を通して、私自身が一人の人間として自立するための道として、日本語教師になることを志すようになった。帰国後は、卒論で『枕草子』を「自立」というテーマで読み解くことを試みるなど、その後就職して教員になってからも、自立して生きる道を模索する日々を送っていた。

大学卒業後、高校の教員として3年半勤務したが、生徒寮に住み込みで生活指導をしながら、日中は学校で勤務するという、過酷な日々を送っていたため、よく母に泣きついて電話していた。経済的には自立の目処が立ち始めたものの、毎日を辛い気持ちで過ごし、未だに精神的に自立できずにいる自分をどうしたら良いか分からずにいた。教員になって2年目の年の正月に、父の実家に訪れたことがあった。父と二人で姫路城を観光し、それまでずっと一人で思い悩んでいた「自立とは何か」という問いを、父にぶつけたことがあった。その時に父は理路整然とはっきりと答えを示してくれ、長年自分の中で凍りついていたものが溶けたような感覚を味わった。仕事が忙しく不在がちで、家庭の中で十分に接することの無かった父と和解できた瞬間でもあった。

高校教師を退職後、日本語教師養成学校に通い、本格的に日本語教師への道に進み始めた。養成講座の修了後は、フィリピンの大学で日本語教師として初めて教壇に立つことになった。派遣先の大学では、日本語クラスを担当する傍ら、同僚のフィリピン人教師への日本語指導を担当し、また近隣の大学で、フィリピン人教師とチーム・ティーチングで日本語を教えていた。現地のフィリピン人教師とは、一緒にスピーチコンテストやジャパンフェスタのようなイベントを開催したり、私にとって、ノンネイティブ教師と協働で仕事をした初めての経験だった。一緒にチーム・ティーチングをしていた

フィリピン人の先生にも、「初めて日本人と仕事をしうまくいった」というようなことを言っていたが、私自身も、その先生とパートナーシップを築けた体験が、すごく心に残っている。それまで一人で自立を求めて生きて来た私が、自分以外の誰かと共生する生き方に目を向け始めた瞬間でもあった。

これまで、両親の結婚を反面教師として、より良いパートナーシップを築くための道として、自立することを目標に生きてきたが、来年秋に結婚を予定している婚約者がおり、自分の結婚が現実的になってきた今、改めてこの問題に直面しなければならないと感じている。

「自律と共生」というのは、1期目から私が修論のテーマとしても掲げたきたものではあるが、今期、「考えるための日本語（テーマを発見する）」のクラス活動に参加するようになり、良い結婚がしたい、という私自身の思いと、フィリピン時代にノンネイティブ教師とパートナーシップを築けた体験が、「自律と共生」というテーマの原点になっていることに改めて気付くことになった。従って、「『自律と共生』を目指した私の原点」というテーマで、本稿を執筆するに至った。

2. 対話報告 一両親の結婚と、「自律と共生」について一

本稿を執筆するにあたり、私は母親との対話を行った。なぜ対話相手として自分の母親を選んだかということ、クラス活動が進行していく中で、私が「自律と共生」ということに拘り続けた要因に、両親の結婚生活への反発があったことに改めて気付かされたからである。自分の結婚が現実的になってきたこともあり、この問題をクリアにしなければ、先へ進めない、というように感じている。そのため、母と結婚をテーマに対話することを試みた。

マナ：あの、お聞きしたいんですけど、お母さんはお父さんと結婚して、一番心掛けてきたことは何ですか？

母：あのね、結婚生活の中でね、やっぱり一緒に暮らしてる人がいつでも心地良いようにしていて欲しいの。それ一番心掛けてることかな。子どもでも夫でも、一歩外へ出

ればね、ものすごく大変なことがいっぱいあるからね、大人でも子どもでも。だから家へ帰って、本当に心地よくいて欲しいなっていうのは一番心掛けてたことです。子どもたちも夫も。

マナ：でさ、これまでの結婚生活で、色々不満とかあったと思うんですけど、今はどうですか？振り返って。

母：今はね、全部それはね、消えて無くなってね、非常にもうハッピーな日々です。

マナ：うん。

母：結婚生活にも感謝してるし、感謝以外には出てこないし。

マナ：お父さんとの夫婦関係についてはどうですか？

母：夫婦関係も、非常に貴重な学びができたと思うんだけどね。学びと自分の進化のためには必要な試練は必ず乗り越えたかなと思う。

マナ：もう乗り越えた？

母：乗り越えた。乗り越えてる、完璧、今は。

マナ：じゃあこれから、そのお父さんとどういう関係を築いていきたいですか？

母：そうね、まあ高め合うしかないかな。それしか残ってないと思う、後は。それでまあ世の中のお役に立つならば、夫婦で一緒に貢献できればなって思って、今*活動してる。

*活動 … 父の退職後、両親は「ハーモニー創造塾」というものを立ち上げて活動している。

ここで母は、「父との結婚について満足している」というような語りをしているが、それが母の本音であるとは言い切れないと思ったため、私は更に突っ込んで話を進めてみた。

マナ：なんかお母さんがお父さんに遠慮して言いたいことも言えずにきたりしてたじゃん。そういうのが嫌だなって思って。

母：私たちの時とは時代も違うから、いいんじゃない？時代も違うし、私も相手が違う人だったら、そんなこと無かったかも。相手がね、全部何でも言えてね、受け入れてくれるんだったらね、そうはならなかったと思う。そうじゃなかったから。何か言ったらガガーって返ってくるから、言えなかったの。それが嫌だったの。そういう関係になるのは嫌だから、もし本当に何でも言いたいこと言わせてくれて、それを優しく受け止めてくれる人だったら、そうしたと思う、私。マナちゃんみたいに。

マナ：なんでできなかったの？お父さんのせいだけ？

母：まあそれもかなり大きいと思う。あの、それが当たり前で来てる家庭で育ってきてるからさ、それを尺度にして女房に対しても接してくるわけじゃん。

マナ：あとね、子育てで大事なことはね、私が思ってるのは、まず夫婦関係が一番に良いことが一番大事なことだと思ってる。そしたら素直に育つ。で父親に対しても、無駄な反抗だとか抵抗感だとか、思春期特有とか言ってるけど、そうじゃなくて、そんな思春期のそういうものを経験しないで大人になってる人もたくさんいるわけで、そういうのって結局、夫婦関係の表れだと思う。

母：それはもちろんそうだけど、思春期の悩みっていうのは、どんなに円満な夫婦関係の中でも出てくるわけだからね。やっぱり自分の魂の成長に即したものが色々出てくるわよ。それは必ずしも両親の関係が良い悪いだけではないでしょう。

マナ：でも親への抵抗感でしょう。

母：親の姿を見て、それは違う。自分はこうしたくないって思うのも成長の証でしょ。ちゃんと親を見る目が養えてるわけじゃん。だからね、色々マイナスに受け止めるよりも、全部糧として受け止めたら良い。

マナ：今ね、ようやく私もさ、結婚の話が現実的になってきて、糧として受け止めて、それで本当にクリアにしていけないと先に進めないなって思っていて、だからこういうインタビューをしようって決めただけ。

母：ねえ、いいよ。糧にすれば良いじゃない。

マナ：私がさ、「自律と共生」というテーマでね、ずっとレポート書いてきてるんだけど、その原点っていうのが幼少期の体験っていうのがあるなあと思っていて、良

い結婚したい、そのために自立しなきゃいけないけど、でも自立は100%できるものでもないし、だからお互い自立できるように、それを支え合うパートナーシップを築いていくことがすごく大事だなって思っていて、だから、私は彼とそういう関係を築いていきたいと思ってる。

母：いいよ。良いことも悪いことも楽しめばいいよ。自分一人では体験できないことをするわけだからね、2人が一緒になることで、世界も広がるわけよ。自分だけの世界プラス旦那さんの方の世界があるからね、非常に人脈も広がるわけだし、世界観も広がるわけ。

私がまだ幼少の頃、夜中によく父と母が離婚話をしていたのを覚えている。姉と息をひそめて聞いていた。その際の結論は、たいがい「子ども五人も産んどいて、今さら離婚も無い」という感じで落ち着いていたようだったが、父との関係において、母が決して幸せな結婚生活を送っているのではないことは、子どもながらに感じていた。母の口から直接父への不満を聞いたのは、小学校4年生の時だったと思うが、その時から、それまで大好きだった父親への反抗期が始まってしまった。思春期を迎えようとしていたのかもしれないが、その時のことを思い出し、夫婦円満な家庭であれば、子どもは親に無駄に反発したりしない、ということも言った。しかし、その事実もう変えられないのだから、過去を嘆いて親を責めるようなことをするのではなく、それを糧に、私自身前へ進んでいかなければならないのだと思う。

マナ：ねえお母さん、どんな人と結婚したかった？

母：やっぱりね、結婚の最初の出会いの頃はね、やっぱり舞い上がっちゃってるからさ、良い所しか見えないわけよ。マナちゃんと彼もそうだと思う。でだんだんに結婚して3年ぐらいして、遠慮が無くなった頃にね、色んな面がね、目に付いたり鼻に付いたりしてくるの。でも、今はやっぱり自分が成長するには、とても無くてはならないご縁だったと思ってるわけ。で他の人じゃ駄目だったの。やっぱりお父さんと色々成長できたし、5人の子どもたちも生まれたし、これ以外の結婚は考えられないんだけど、でも相手としてだったならばね、やっぱり大らかな、体格も大きくって、大らかな人

がいいね、本当に。例えばどういうタイプかって言うと、コメディアンでさ、伊集院だっけか。

マナ：ああ、光？

母：例えばああいう人とかさ、好きとか嫌いとかじゃなくて、タイプ。人柄としてね、ああいう人とかね。山崎だっけ？

マナ：あーはいはい。アンタッチャブル？

母：アンタッチャブルの山崎とかさ。ああいうのが好き、どっちかって言うと。何でも受け止めてくれて、大らかでね。

マナ：お母さんはすぐ引っ込んでんじゅうからね。

母：そう、だからのびのびさせてくれる人が良いの。

マナ：私も真帆ちゃん（姉）も全然引っ込まないじゃん。ぶつかってくじゃん。

母：そう、そこが違うね。

マナ：でも（彼は）そういうのが面白いって。

母：ね、彼はすごくそれを長所として捉えてくれるからね、それはありがたいじゃん。私の場合はね、そんなこと言ったらね、ピシャッと上からもう、断ち切られてしまうからさ。生意気なこと言える状況じゃなかった。やっぱり（父の実家が）男尊女卑の家だったからね。そういうこともあるの。だからしょうがない。相手次第だ。だからもし本当にね、言いたいこと何でも言える相手だったら、また違った人生だったでしょう。

マナ：生まれ変わってもお父さんと結婚したい？

母：絶対しません。

マナ：（笑）

母：こういう堅苦しいの好きじゃないから。私ほら直観肌でしょ？直観肌と合うわけがないじゃん、肌質が。噛み合わない。だからそれは無いと思う。するんだったらやっぱり、楽しい相手じゃないと。

「生まれ変わっても、父と結婚したいか」等と、陳腐な質問をしてしまったが、母の答えは案の定「No」だった。両親の結婚生活を見てきて、父が母に対して優しく接している姿を見ることがほとんどなかったが、父の実家の家風にもその要因があったという話を聞き、少し納得がいった。父の実家はもともと武士の家系だったようで、父方の祖父母には、所謂「男尊女卑」的な考え方があったらしい。そのような価値観は、父と話していてもたまに感じることはあったが、本来女性と男性の本質は違えど、それが優劣の差であるはずがない。今まで意識したことは無かったが、両親の夫婦間の問題が、時代背景的なものにも影響されていたことを知り、そこに少なからずショックを受けた。

マナ：お父さんお母さんいないと生きてけないじゃん。

母：そうかもね。普段はあんなに威張ってるのに、いざとなったら、かなり私に頼ってる感じね。

マナ：そうだよね。お母さんはお父さんいなくても生きていける？

母：経済的に困らなければ全然大丈夫。

マナ：（笑）

母：もともとがね、一人暮らしの方が好きだから。

マナ：精神的に自立してるね、お母さん。私より。

母：そうかな。全然私さびしがり屋じゃないの。

マナ：そうそう。私さ、経済的には自立できるかもしれないけどさ、お母さんみたいに精神的に自立できてないし、できる自信があんまり無い。

母：そうかな。

マナ：たぶんパートナーいないと私はちょっと耐えられないと思う。

母：そうなんだ。人それぞれだから、それも。

マナ：お母さんは、だから精神的に自立してるね。

母：そう思う？

マナ：うん。私よりずっと。

ここで、「自立」の話になったが、母はずっと専業主婦できているので、家庭の中で経済的な基盤は父親に依ってきた。そのため、父に遠慮して言いたいことも言えず、離婚したくてもできなかったのではないかと、母は女性として自立できていない、だから女性も経済力を付けなければ対等なパートナーシップは築けない、と思っていたが、そうではなく、母は母で自立した道を生きていたのではないかと、思うに至った。それよりも、私自身は、パートナーと共に、互いの自立を支え合うような関係を築いていきたい。そのような関係を自分以外の誰かと築いていくことが、私にとっての共生である。

母：うちの5人の子どもたちは皆自立してるんだけどね、自立の基本はね、親の愛情をたっぷり受けてるかどうかと私は思ってる。その一つにかかっているような気が私はしてる。小さい時からね、たっぷり親の愛情受けてれば、安心して外に出ていけるの。ところがね、親の顔色見ながら生きてきたり、親の愛情たっぷりもらえなかったりしたら、外へ出て自立しようにも、何か今一つ物足りないものが心の奥にあるからさ、のびのびと自立の人生に踏み出せないのではないかなって思う。今も私が良かったなって思うのは、子どもたちが高校卒業したらどんどん遠くへ離れて行ってね、自立して、全員がそうでしょ？親元離れて。自分の世界をどんどんどんどん苦労しながらでもやってきたじゃん。それはね、受けるべき時に愛情をたっぷり親から受けなければそれはできないんじゃないかなって思う。

マナ：でもお父さんはいつも仕事で家にほとんどいなかったじゃん。

母：それはね、片親の人もあるし、どちらかの親でもいいの。

マナ：ああそっか。

母：お父さんがバッチリ外で稼いでくれたお陰で、お母さんが専業主婦をやれて、それは本当に良かったと思ってる。四季折々の行事も色々やってみたり、クリスマスにはパーティをやってみたり。

マナ：でも、私の時はお母さんけっこう手抜いてたよ、子育て。

母：かなり抜いてたね。まあね、でもね、けっこうやってたのよ、色々。だからさ、たっぷりそういう家庭の味を味わったら心おきなく外へ飛び出して行って自立できるの。それが大事なポイントじゃないかなって思う。うちの子はみんなバーって外へ行って、のびのびと親元を離れて巣立っていったでしょ。それも嬉しいことの一つなの。皆ちゃんとして自立してくれてるなって。

マナ：良かった最後に教えてもらって。気付かなかったよ。

母：あ、そう。私もそれだいたい後になって分かってね、それが。みんな、マナちゃんも出て行って、しばらく経ってから分かった。あ、そっかーと思って。というのは今あまりにもね、引きこもりが多いからね、すんごく多いでしょ。そういう人たちが多からどうしてだろうって考えたの。一歩外に出ればいいわけじゃん。アルバイトでも何でも。それができないってことはね、親元を離れられない何かがあるわけじゃん。だから受けるべき時にたっぷりとね、しっかりと愛情も注いでもらっていないければ、なんかやっぱり不安なんじゃないかな、外へ出るのが。そこがキーポイントかなってというのが、私なりに感じたこと。正しいかどうかは分からないよ、それが。私なりに感じてるのはそういうこと。

最後に、子どもの自立と親子関係の話になった。私は五人兄妹の末っ子で、高校を卒業して大学に進学すると同時に、上の姉妹たちは皆家から出ていった。従って、自分の進路を決める際にも、親元に残るという選択肢は全くなく、自分の道は自分で切り開くものだ、という思いが昔からあったように思う。国際交流関係の仕事に携わっている父の影響もあり、上の兄弟たちも私も、皆それぞれ海外に留学したり、海外勤務を経験しており、私が日本語教師として今後も海外ベースで働いていこうとしていることに対しても、ただただ応援してくれている。自分の中に備わっている自立心は、両親の支えによって成り立っているものだ、ということをも母から教わり、今まで親への反発心から自立心が旺盛なのだと思っていた私にとっては、とても心に残る言葉となった。

私自身、まだ親の立場を経験していないため、見えていないものが多いのだと思う。それは当たり前のことだ。でも、こうして母と対話したことで、「自律と共生」と

いう私のテーマが、親の立場から見てどのように映っているのか、知ることができてとても良かった。

3. 結論 ー私にとっての「自律と共生」の意味ー

「自律と共生」というテーマは、もともと親への反発心から来ているものだと思っていた。しかし、それは親の愛情をたっぷり受けて育ったからこそ、自分の道を切り拓くための力を得て、私は今日まで「自律と共生」を目指して生きてこれたのだと思った。

「自立」というテーマは、中学生ぐらいの時から自分の中にあった。良い結婚をするためには、自分が自立していなければならない。そして、自立するために、まず自分の道を確認しよう。そして、日本語教師になることを目指し始め、フィリピンでの教師経験を通し、「共生」というものにも目を向けるようになった。他者を必要としない「自立」ではなく、他者を介在し得る「自律」を目指したい。他者と共に互いの自律を支え合う「共生」の関係を築いていきたい。その思いは今でも変わらないが、私にとっての「自律と共生」の原点である両親の結婚について対話を行ったことで、両親の支えがあったからこそ、今の私がある、という当たり前のことにも実感として感じられるようになった。

私にとって「自律と共生」とは、パートナーシップである。それは結婚生活においても、自分の日本語教師としての仕事の中でも、他者と手を取り合って生きていくための指針である。

4. 終わりに ーこの活動の意味ー

これまで、3期に渡り「考えるための日本語」のクラスに参加してきた。1期目は実習生として、2期目はボランティア、そして3期目である今期はTAという形で、クラスメンバーと共に、私のテーマを追究してきた。私が「自律と共生」というテーマに出会ったのは1期目のことで、その時は父親との対話をもとに、「自立」と「共生」が切り離せないものであることを結論付けた。そして日本語教師として、「自律と共生」を目指した言語教育の実践ができるようになりたい、と考えるようになった。2期目は、「日本語教師としての専門性とは何か」というテーマで、養成学校時代の先生と対話を

行い、教師としての理念と、一人の人間としての生き方を一致させていくことが専門性に繋がる、というような結論を出した。そして今期、日本語教師としての私がなぜ「自律と共生」を目指すのか、私にとって「自律と共生」とは何か、改めて向き合うことを決意し、母親との対話を通し、両親の結婚生活への疑問から、より良いパートナーシップを築いていきたい、という私自身の心の声に耳を傾けることとなった。結婚という人生の節目を迎えるにあたり、両親との向き合い方が変わってきているのも感じている。

また、これまで修論のテーマとして掲げてきた「『自律と共生』を目指した言語教育の構想」についても再考し、研究計画書を大幅に書き直すことになった。「ノンネイティブ教師の養成のできる日本語教師になる」という、自分が以前から目標としてきた将来の進路に繋がるものとして、「ネイティブ教師とノンネイティブ教師の協働実践による教師間の学び」に焦点を当てた研究を行うことを決意するに至った。日研に入学し、これまでさまざまな実践研究に携わったことで、これからは自分の実践がしたい、という思いが高まってきている。そして秋学期は大学院を休学し、10月から来年の4月まで、インドネシアでEPAに基づく看護師・介護福祉士候補者への日本語予備教育に従事することを決意するに至った。研究のフィールドをインドネシアに移し、自分の実践をデータに、自分にしか書けない論文を書きたいと思っている。そして、それを卒業後の進路に繋げていきたい。

このような人生のターニングポイントに立ち合ってくれたグループメンバーのお陰で、定期的に自分の状況を話す機会が与えられ、また後押しをしてもらったことで、自信を持ってわが道を進む決断ができたように思う。私にとってこの活動の意味とは、過去の自分を浄化し、メンバーと共に、これからの自分の道を切り拓いていくための糧を得たことである。改めて、メンバーには感謝したい。

Ⅲ あとがき

「考えるための日本語」という活動を通じて私たちは、それぞれ自分の中にある思い込みや固定観念に縛られ、まるで檻に閉じ込められているかのように身動きが取れなくなってしまっていた自分自身に気が付きました。これまで私たちを苦しめ続けてきたものの正体は、周りの人間でもなければ社会のシステムでもない、ほかならぬ自分自身だったのです。白いものは白、黒いものは黒と信じて疑うことのなかった私たちですが、今この活動を終えて、今ある色に自分の生き方を当てはめることだけが正解ではないと思うようになりました。白か黒かを選ぶのではなく、それぞれが好きな色で好きなように自分のキャンバスを彩ることが大切なのです。

私たちにとって「考えるための日本語」は、様々な思い込みや固定観念の檻に閉じ込められていた自分自身を救い出す作業でした。これから先もまた、思い込みや固定観念によって傷ついたり苦しんだりすることがあるかもしれませんが。しかし私たちはもう檻から出る方法を知っています。さあ、今扉は開きました。私たちのピカピカの未来へ向かって。

